

浄土

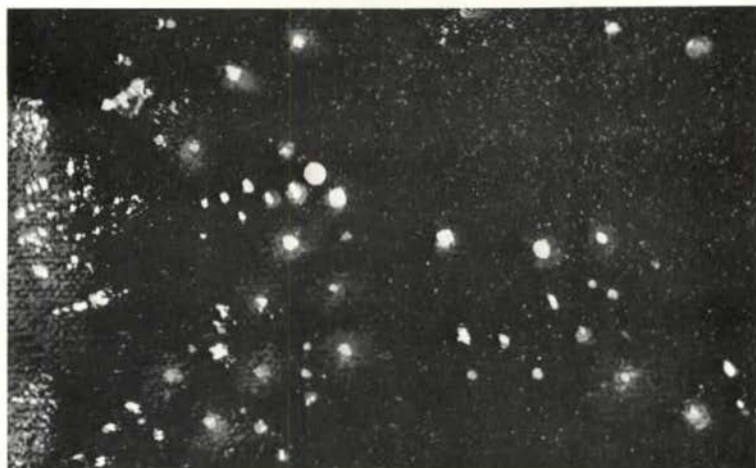
1982-9

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特種郵便物認可)第三二五号
昭和五十七年八月二十五日印刷
九月
第四十八卷



一 柚子と 壺 一

三 耕 西 大



星 月 夜

オリオンの九月の深夜見るかなしさ

遷子

秋になると、澄みきった夜空に光り輝く星々が美しい。満天に散りばめられた宝石のような星たちの群れを見て、遠いはるかな宇宙の神秘に誘いこまれる。限りない天空の高さと大きさに、あらためて驚異を感じる。測りしれない大宇宙の広がりと思ひが、私をおおいつくし、私の心の奥深く、私の心の底にまで透徹（とうてつ）してくるようだ。

先刻まで、耳の内と外に騒しかった鈴虫・松虫やらの秋の虫たちの合奏が、突然に聞こえなくなるほどの一瞬である。そしてすべてが消えて行くような静寂な一瞬でもある。

すべての想念は、雑念であり、また妄念である。私は考えることを拒絶したくなる。

星月夜空の高さよ大ききよ

尚白

月のない夜、星明りの一夜、私は静かなひと時を過してみる。
(勝崎裕彦)

九月号



布施と調意戒と忍と精進と是の如
きの三昧とは智慧を上（すぐ）れ
たりとす。

——『無量寿経』歎仏頌

目次

—— 法 話 ——	
彼岸随想……………	中 村 真 道…………(2)
(一) (口) (法) (話)	
身命を惜しまない信念……………	村 瀬 秀 雄…………(8)
法然劇の前進座	
—その感動をつづる—……………	高 橋 良 和…………(10)
<勢至丸ものがたり>第四回	
宇宙船「父号」……………	布 村 哲 哉…………(26)
耳に逆らう言葉	
—先師・恩師を語る—……………	峰 島 旭 雄…………(18)
ナイル河旅情……………	細 田 隆 善…………(14)
詩, 三題……………	吉 水 正 三…………(16)
<連載>	
後鳥羽上皇と無常講式(-)……………	宝 田 正 道…………(31)
<読者のページ>	
椎尾先生なつかしや……………	清 水 栄…………(22)
浄土句集……………	一 田 牛 畝 選…………(24)
<表紙裏・巻頭言> 星月夜……………	
念仏ひじり三国志⑩——法然をめぐる人々……………	寺 内 大 吉…………(37)
表紙 大西耕三画	

カット 大正大学美術部

彼岸随想

一 秋を迎える

みちのくの夏は短いのです。その燃焼は夏まつりの行為に全てのまつりを凝集する。八月お盆を中心にみちのくのお祭りは全てを傾注してみちのく各地で燃え上る。踊りは盆踊りがそのフィナーレである。その中には人と人との出会いと別離とを越えて今生きてい



中 村 真 道
なか むら しん どう

(仙台市愚鈍院住職)

る想いを、喜びを、悠久の生命の流れを、祖先との繋りの姿の中に確かめる故里の叫びでもあります。そして夏は幕を閉じ秋は本当に急速に深まる。それはやがて来る冬を迎える心の構えを、冬のきびしきを受けとめる人間の術を、秋の澄み切った青空とたわやかな自然の稔りと収穫の中にすみやかな実践で備えを整えねばならぬものの呼び掛けであると知らねばならないから、みちのくの夏は誠にあわ

ただしく逝って秋を迎えるのです。八月盆として九月秋彼岸、隣り合わせのいそがしいなつかしさを与えてくれます。

秋の収穫に皆が一生懸命汗を流すその上を赤とんぼの群が乱舞し、夜ともなれば虫のすだく音色がおちこちの叢でシンフォニーを奏でます。この一刻の姿の中に一年の生命の終焉を見ざるを得ません。冬の苛酷な寒さの中

で耐えた生命が、温湯の春の生命の芽ばえを夏のチリチリと照る太陽に育々と成育し秋の実りを迎えます。そして一過の生命はみちのくに終えてしまうのです。みちのくの人々はその四季の中に人生を痛程感得し、大自らの生命の営みの中に、吾も亦包まれて生きていることを教えられて来たのです。――法句經――に、

よき法を聞き　その法にしたがう人は
越えがたき　死の境域を越えて

彼岸に到らん

と教えられてあります。私共みちのくの人々は、みちのくに生れ住んで生きて来た故にこそ、大自然が繰り返すきびしい営みが教えてくれるもので、この法句經の内包するものを理解することが出来るのです。

二 生命の終焉

先日県北から溪谷の幻の魚といわれる「いわな」をお土産に私の寺に見えられた住職が、四方山話の中にはさんでこんなお話しをしてくれました。北には馬産地が多いので県北の山奥のお百姓が、昔はこの農家でもみな家ごとに馬を飼っていました。その馬が寄る年波で、仕事が出来なくなると、吾が家で死なすわけにはまいりませんで、どうしても搏（ばく）うに売らなければなりません。その時節は作物の収穫がすんでやれやれと一年の労苦をかみしめて、心なごむ秋も深まったときだそうです。お百姓は馬をきれいに洗ってつやつやと

みがいてお寺に連れて来ます。ご本堂の前の境内に植えてある樹木に馬を繋ぎとめて、新米のお仏餉米といくばくかのお布施を持って庫裡へ挨拶にやって来て申します。「お願いすすすだ、お経を一巻上げてやって下さい。おっさん（お和尚さまの意）、馬っこに聞けるようぬ（に）でっけ（大きな）声でお経ば読んで下さいね。今度は人間に生れて来て御縁に会って吾が家の家族で暮しえればいがっぺっちゃなあー（良いのだがなあ）」と言って涙を拭いはらはらと又涙を流すのです。そしてお供えしたお仏餉米の中から一握りの新米をもらって帰り、最後の食事の中に混ぜて食べさせるのだそうです。私はこの話を聞いて涙がとめどなく流れて久しぶりに泣きました。自分の都合のため働いて働いてもらった力つきた馬を休息させてやれずに殺さなくてはならない宿業の思いと、すまないなあ、すまないあ、と涙ふりしぶりながら、「かんにんしてけろや」と懺悔の熱いほとばしりとが味わえてな

りません。貧しい時代のお百姓の心の中にさえ今では求め得ぬ仏の慈悲心に生きた、名もなき尊い人に出合ったことよと強く強く思いとらせて頂きました。

三 秋空のように澄みきった心

暴力を振るう若者たちの行動をみていると最近の青少年の非行化現象は、家庭環境にはためから見た眼には特別問題のないごく普通の子供が非行に走ってしまういわば非行の一般化現象がみられ、青少年を如何に健全育成するかその対策が大きな問題となって来ております。この家庭内暴力や校内暴力は核家族と言う特殊な中からの産物ではないでしょうか。核家族の中で、吾が子を疑の眼で見つめ信用をすることがまれで、他の子供と比較し批判し、小さな事柄をとり上げて、くどくどと小言を言う。深い親子の絆がほどけうすれて親だけが意味もなくあせって、親と子の

価値観の違いから不和を誘発し、また学校でも一人一人を解らうと努力しない先生に逢って自分を解ってくれられない先生に対する不信感。訳もわからぬ中で唯叱られたことの不満。規則が訳もなく厳し過ぎることへの反発等々から暴発するケースが多いようです。近年は社会教育が大いに注目され活潑化して、閉ざれた教育から、生涯にわたる人と人との触れ合いの中での心の交流に迄、生きがいを見い出す教育がとり沙汰されてきました。地域社会全体で、村や町や、市全体で子供たちの成長を総合的に分析し思考し、育成しようという運動が展開され、非行化の防止策を考え実践に移されています。近ごろの子供たちは教科書からだけではなしに、マンガ、テレビ、映画雑誌等々、他からの情報社会に依る物知りの知識を沢山持っています。が、日常生活の中での知識能力はあまりないようです。

私たちの先祖が、永い間、体験と創造、

経験と失敗等の中から生れた「生活の知恵」を駆使して、祖父母、両親、子供、孫と小さな家族集団の中で、そして心の交流のあった向う三軒両隣の地域社会で、村で、町で、温かく保存され受け継がれ、生かされてきた尊い知恵が生活の中から取り去られ、忘れられようとしています。みちのくは秋の彼岸が終ると冬への準備に向うのです。冬の永い期間のために漬物のシーズンに入りますが、今はほとんどの家庭が大量に作られた既成の漬物で安易に暮すから我が家の漬物の味から得たおふくろの味は消えてしまっています。みちのくでは姑から嫁にその娘にと我が家の漬物の味を教え伝えたものですが、それが今は消えてしまいスキシンシップがなくなりました。漬物一つでもそうですから、一般的には物知りの知識で、独断と偏見、身勝手な言葉と行動を生みだし、むき出しの奔放な生活に走る若者が横行している現状です。私たちが生活する現在の家庭を築き上げられたのは、縁あ

る先祖の方々の生活の知恵と、ご先祖さまの心の支えとして信仰してきたかけがえのない宗教心ではないでしょうか。核家族化した現在の一つ一つの家庭を見ると宗教心がなく個性はバラバラで融け合わず、心の安らぎはいすこにありやと思うばかりの、親も子も孤独化状態です。

先日、「呼びかけの徳」と題したエッセイを読まさせて頂きました。

奥さんが実家の看病で留守になって、五歳の坊やが泣き出し、何が悲しいのやら、何が淋しいのか原因がわからぬまま、父親は子供の手をとって散歩に出かけました。泣きじやくりながら父と手をつないで歩く坊やは、歩道橋の上から、クスン、クスンとすすり泣きながら、通り抜け走り抜ける自動車に手を振りはじめました。五分たち、十分たちと小さな手を振り続けていると、一台のトラックの運転手さんがニコニコ笑顔で大きく手を振ってクラクションを鳴らして走り抜け通り過ぎ

ました。子供は急に笑顔になり、大きくステップを踏み、車の後姿を見送りながら、幾度も幾度も車の走り去った方角を振り返り振り返り父親の手を強く握りしめ家路をたどりました。——と書き終えてありました。

子供の悲しみの原因はさて置き、誰も見向きもしてくれない中で、見知らぬ人が笑顔で手を振ってこたえてくれた喜び、相手の問いかけにこたえてあげることの思いやりの心が呼びかけの徳ではないでしょうか。

み仏はたえずほえんで私たちにまなこ注ぎ、心痛め悲しんでる人間に呼びかけ、手まねいているのではないのでしょうか。私たちは秋の彼岸にこそ虚心に、私たちを生かさせて下さり、ほほえかけるみ仏や、今日ある命を誕生させはぐくみ下さるご先祖さまからのぬくもりのお慈悲を感じ、おすがりすると、身も心も生き生きと青くくつきりと晴れわたった秋空のように清らかなすがすがしさに浸れる筈です。

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後ともまた、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20 cm×30 cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30 cm×50 cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度分、九月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―一―六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振替(東京) 八―八二―八七



(一) (口) (法) (話)

信念を惜しまない身

お 雄 秀 ひで 瀬 せ 村 むら

藤井実応門主が増上寺法主として発送した六月二五日付のハガキ通信に、この号をもって終焉号とする旨の断り書きがあった。このハガキ通信は昭和二五年八月に第一号を出したの始まり、この号に至るまで実に三二一号を数えている。この三十二年間にわたって配されたハガキの数は二五万六千枚にものぼったということである。これだけ長期にわたって精進し続けてきた師の布教実績は、余人の追隨し難いものがある。祖山に入るといろいろな事情から当分ハガキ通信が出せなくなるであろうから、一応ここで終りにするということであって止むを得ないことと思うのであるが、一方ではいかにも淋しい気持がしたのである。しかし今後はハガキあるいは雑誌によってお訪ねしたいと考えているとも記しているので、是非ともそのように願いたいと期待させていただく。

ハガキ通信にも、宗報所載の門主ご挨拶にも「有縁の人のためには、身命を捨てても偏に浄土の法を説く」という宗祖のお言葉が引用されている。宗祖は遠流のために京を発つ時に、弟子の西阿弥陀仏に向って「自分はたとえ死刑に行われることがあっても、一向専修の教えを説かないわけにゆかぬ」といい給うた。宗祖の態度に至誠の様子がありありと伺えて、これを見守っていた人々は万感胸に迫り、一様に涙を流したのであった。更に宗祖は讃岐の国の塩飽島に着いた時に、高階保遠入道の西忍に常不輕菩薩が杖木瓦石の難

を忍んで教化したことを説き、ついで「どんな方法を講じても人々に勧めて念仏を唱えるようにさせなくてはならない。人々に念仏の法門を説くことは、何も他人のためばかりでない」と論じ給うた。

ご伝によれば建暦二月正月二十三日からの宗祖は念仏を一時間から二時間位にわたって唱え続け、しかもたまに高声念仏であったという。このような時に勢親房源智はあえて宗祖に「念仏を唱える時の心の持ち方は長年教えを頂いてきました。しかし更にご自筆によって大切なご所存をご一筆下され、頂戴できますならば、後々の御形見にいたしたいと存じます」と申し上げた。すると上人は筆をとって一枚起請文を書き記し給うた。しかし思うに、このような時によくぞ源智が懇請したものであったし、宗祖もまたよくぞ書き記し給うたものであった。江戸後期の学僧である法洲は、宗祖の御慈悲と勢親房の慈悲が一つに融合したところに一枚起請文ができたのであると述べている。まさしくその通りであって、嚴寒の部屋で繰り広げられた師弟の慈悲には身命を惜しまない恩情が感ぜられるのである。そのおかげで今までと同じように遠く将来にまで、老若男女の別なく多くの人

々が苦海に浮ぶ阿弥陀仏の本願という大船に乗り移れるように、短くても安定した道杖が得られたのである。ただ一向に念仏すべしという教えをいただいて、誰もが同じように救われることになったのである。

また藤井門主は挨拶文の中で「浄土宗の教え、行事のあり方等、すべて伝統を重んじてこれを現代に開顕することであります。伝統を重んずるということは、同時に一歩前進してその時代、その社会に宗祖精神をうけつぐことに他なりません」と述べている。もし伝統を重んずるだけのことであり、先例に倣った行事に終始するとすれば、それだけでもはや宗祖精神を見失うことになる。宗祖はこれが仏教であると信じられていた難行道をすてて易行道を選びとり、凡入報土をあらわすために新しく浄土宗をたて給うたのである。それもこれもその時代の社会に仏の教えをいかすためであったし、釈尊出世の本懐を顕現させるためであった。伝統を軽視することは許されないにしても、教えを現代にいかすように努力し続けなければならない。そのためにはまず第一に、現代の意識と教養によって宗祖のご法語を繰り返し味読することが大切である。

『法然上人お誕生八五〇年慶讃』

法然劇の前進座

—その感動をつづる—



高橋良和

(児童文学者)

創立以来五十五年の劇団の歴史をもっている劇団前進座が、我が宗祖法然上人の生涯の劇化を考えたのは、三年半ばかり前である。足かけ四年はかかった。

そのころ前進座の座員であり、親鸞劇の「親鸞」で好評をうけた柚英二郎君という俳優がいた。この人は俳優ではあったが、寺院生れの人であって、たしか七高に在学していたときから演劇に興味をおぼえ東上して演劇の畑に入り、劇団劇座をつくり、その後前進座に入座した根っからの芝居好きであり、前進座では僧侶の役のとき

は、必ずといってよいほどこの人の役柄であって、亡くなる前までの親鸞役で好評をうけた。

あるとき柚君が、「法然上人の芝居がやれませんかね」と友人のわたしに声をかけてくれたのが縁となってこの法然の劇が、劇団として取りあげるようになったが、その柚君は三年前の年末に逝去している。まことに惜しい俳優であり、前進座の中堅どころとして、なかなか佩服されていた人だけに、わたしもがっかりした。

このようなことがきっかけとなって三年半ぐらい前



—遊蓮房との出会い—

に、劇団に赴いて法然上人の生涯を二時間余にわたって話したことから、いよいよ本格化したといえる。

その間劇団としては勇気が必要であった。劇化のこともさることながら、観客動員のことである。はたして浄土宗にそれだけの動員力があるか、という問題がわたしの脳裡にも去来した。しかし八千カ寺の浄土門の寺院があるから、もし全国での縦断公演ということで、法然上人八百五十年のお誕生の年に的をしぼって公演をすれば必ず大丈夫ということを経営部門の人々に話しをしたので、親鸞、日蓮、さらに古くは天平の夢、あるいは五重の塔といった芝居が成功しているということを参考に、遂に劇団の決定をみたのは、二年前である。

その劇作については劇団の作家の田島栄君がいち早く決定し、つづいて演出が同じ劇団の高瀬精一郎君になって、これでいよいよ劇化は大丈夫と思った。

作家の田島君は、まことに熱心な人で、わたしからいろいろなことを知りたい、特に郷土史的な、足で歩いた法然上人のあとをたずねられて、関係の人々とともに岡山県の上人誕生の地、誕生寺から、本山寺、菩提寺、比叡山の黒谷、京都の遺跡、そして大原、鹿力谷など二度

にわたって廻り、その間何度も入浴して、高瀬君と膝をつき合っていて、夜のふけるまで語り合ったことは一度や二度ではない。

わたしもその熱心さに感心どころか、感動して今まで調査した資料を提供した。もちろんわたし一人の力ではない。田島君の研究ぶりもすごかった。浄土宗の宗学はもちろん、底辺となるべき仏教の哲理をよくあれまで消化したと思うし、その間竹中信常先生や宝田正道師、あるいは太田秀三教学局長などの支援も忘れられないものがある。田島君の熱心さと、前進座の中村梅之助君をキヤップとするスタッフの諸君の探究心がそうさせたのかもしれない。

わたしの不安は芝居のことではなかった。終始観客動員のことであった。

しかしさる七月十七日の京都南座公演の蓋をあけてみたとき、その危惧は見事吹飛んでしまって、連日補助席が出るほどであり、それも尻上りにどんどんと増えて大入袋が出る始末であった。

ほとんどの人がこの感動的な法然上人の劇に涙を流していた。それは俳優諸君の演技力の見事さである。

中村梅之助君については、上人の人間像を通したふれ合いと、その風格の一致にたいそう苦勞したようで、わたしの家の大きな額の法然上人像やあの隆信の御影に魅せられていたようで、特に嵯峨二尊院の宅磨法眼の足曳きの御影には、ほの暗い本堂でのぞき込んでその風貌に接していたのは忘れ難い。

俳優諸君や音楽、装置の人々とも何度かその遺跡を訪ね、また天台の声明の研究者であり、洛北大原の声明の研究者である天納伝中師には、天台声明のことについて素人の疑問をぶちつけて指導をうけた。

梅之助君の法然はちよつと数えてみると、二百五十余カ所の台詞の消化がある。まことに見事である。全部ちやんと消化していたのは、さすがというほかはない。

風格がすっかり法然上人になりきった。おそらくこれから梅之助法然のイメージが登場すると思う。

僧侶ばかりが登場してはカラフルさがないということから、演出の高瀬君が最初の構想のように「今様」をとりあげて舞踊も加えてくれたし、大仏炎上と重衡を配して「善人なお生るいわんや悪人をや」のあの法然上人の心を画き出してくれた。



一法然上人と兼実一

宗教劇はむつかしい。まして浄土宗の安心をその流れのなかにとりあげたことは、珍しいことであるし、あの難解な思想も見事に生かされていたし、特に大原問答のくだりはまさに圧巻であるといえる。劇団の大幹部の一人である市川岩五郎丈のあの演技力でぐっとしまったのはうれしい。

その他熊谷運生、あるいは信空、教阿弥陀仏、叡空などの脇役の存在が大きく盛りあげてくれたし、フィクションであったが、茂右衛門とお虎夫婦の活躍が、この劇の立体化をつくる上に役立っている。

俳優の一人一人をたたえたいが紙数がない。

みんなが法然劇のなかに生き生きと活動していた。さすが前進座である。

京都公演につづいて八月二十四日から東京での読売ホールでの一カ月公演、そして明年は二月に大阪、そして名古屋公演を経てあとは全国縦断公演となる。

全国の同信同行の友は、この公演を温い心で迎えてほしい。そして前進座のこの好意ある企画に対して一宗はもちろん、有縁無縁の同信はその観劇に一夕を割いてほしいことを期待している。

ナイル旅情

ほそだりゆうぜん
細田隆善

(東京・深川勢至院住職)



— ナイル河、アブ・シンベル神殿前の筆者 —

アイシャドーの起りしと聞くエジプトの
ステュワーデスの眼の縁蒼し

機内食のナイフとフォークを仕舞い込む

出稼らしきフィリッピン人

バレレンの国際空港を囲みいる

黒き機銃は真夏日に向く

遙るかなる雲の真下ゆベイルート

攻め囲まれて陥つる日近し

苛立ちつつ三十一時間待たされし

エジプト航空機カイロに着けり

一直線に高速道路の見ゆるのみ

リビア砂漠は果てなく広がる

手を振れば手を振り返し微笑める

エジプト人は明るき性持つ

エジプトの子等集まれる窓外に
空手の真似をすれば喜ぶ

ピラミッドは王者一人に建てられぬ
アスワンダムは国民のため

イスラムの断食今日より始めて
カイロの街の夜の賑はふ

ピラミッドの肩に三日月かかり出で
スフィンクス黒く夜空に浮ぶ

イスラムの土葬の墓は砂原に
小さき石載せ並びあるのみ

ベリダンスに更けゆく若き踊り子の
大なるバスト激しく揺れぬ

この席にサダト大統領撃たれしと
驚の飾りの光り煌く

この墓にサダト大統領眠りをり
仏桑華の花萎れてありぬ

五十度を超ゆるデンデラの大神殿に
煌き燃ゆる真夏日暑し

再びは見るることならむデンデラの
クレオパトラのレリーフを睨む

カルナックスの大神殿の灼く砂を
握れば手より忽ち逃げ落つ

ビクトリア滝より三千キロを流れ来ぬ
ナイルの流れを掬いてみたり

布袋草浮べ流るるナイル川の
歴史を秘むる水面を見詰む

アスワンよアレキサンドリアよルクソールよ
ナイルよさらば夏の旅果つ



詩三題

秋、あしたになれば

満月の中を蝶の化身がおどり
竜の子が月を呑みはじめる
人の世にちぎれた愛がとびかい
情けの拾い屋がそれを集める
明日になれば秋はたけなわ
明日になれば秋は禅定

よし
みず
まさ
み
吉水正三
(東京・足立中川善応寺住職)

退場

舞台からひとりひとり

役者が去ってゆく

長い影をひきずりながら

さよならも言わずに

そっと去ってゆく

あとに暗幕がゆれ

スポットライトが空しい輪をつくる

御苦労様、有難うとつぶやいて

その後姿に合掌しよう

私もいつかそのような

退場をしたいものだ

血

あなた――

血を流したことがありますか

まっかな熱い命のかけらが

身体からトクトクと流れおち

痛みと苦しみと不安の渦の中で

白い世界を

気がとおくなつてゆく

そんな地獄の想いを

感じたことがありますか

あなた――

耳に逆らう言葉

— 先師・恩師を語る —

「言葉」には生命があり、思想がある。生命のない言葉、思想のない言葉は単なる記号にすぎない。「言葉（ことば）」といわれるほどに、言葉には生命がある。

私たちはまた思想を言い表わすにはどうしても言葉を用いなければならない。

だから、言葉は私たちに語りかけ、私たちの生命を更新し、思想を変革することができる。だれでも、生涯にわたって忘れない言葉というものを持っているだろう。そして、人との出会いばかりでなく、言葉との出会いということもありうる。人との出会いもしばしば言葉

峰^{みね} 島^{しま} 旭^{ひで} 雄^お

（早稲田大学教授）

を通じて生ずることがあるのである。

最近、戦前の『浄土』誌を丹念にめくってみる機会があった。そこには、私にとって懐しく敬慕する先師・恩師の名が見出された。すでに故人となられたこのような方々の「人」はいま眼前にない。しかし、残された「言葉」はいまなお存する。その「言葉」は、『浄土』誌がそうであるように、あるいは活字に組まれ、書物として残されている。しかし、そのような形で残されていない「言葉」もある。発せられただけのそのような「言葉」



は記憶にのみとどめられて、語り伝えられないかぎり、消えていく。言葉と共にある生命、思想も、そのさい、消滅せざるをえない。

私にとって一種の衝撃となり、生命を更新し、思想を変革した言葉は、二、三にとどまらない。戦前、そして戦後も『浄土』誌上で健筆をふるわれた先師・恩師たちは、私にとってのそのような言葉を、私に残してくれた。それらは、私のブライバシーにもかかわること、いまだ活字の形ではとどめられていない。いま私はそれらを、あえて活字に残そうとするのである。ブライベイトなことどもを記すことをお許しいただきたい。

私の父は四十九歳で病没した。当時私は十八歳であった。まだ戦災後のバラックの頃、寺のあとを継ぐため、私は旧制山形高校を退いて、大正大学予科に入った。戦後の学制改革で、予科三年を終えたとき、いわゆる新制大学が誕生し、私どもはその三年度へ移行した。そのとき専攻を決めなければならなかった。もとの語学好きのこともあって、私は英文科に入った。父の死という

ことがなければ、山形高校で文乙（文科乙類、ドイツ語を第一外国語とする）を選んでいたら私は、たぶんドイツ語学ないしドイツ文学の方面に進んでいたであろう。いづれにしても、語学畑であった。ところが、ある日、私は、何のためかいま思い出せないが、予科当時担任でもあった大正大学の佐藤良智先生をお訪ねした。小石川の光円寺は戦災後まだ本格的には復興していない時で、庫裡の庭に面した濡れ縁のようなところで、先生にお会いした。私が英文科に入ったことをお話しすると、先生は「君は西洋哲学科へ進め、そして佐藤賢順教授に就け」と言われた。この天来のごとき言葉は、私にとって「耳に逆らう言葉」であった。当時の私は語学の勉強に浸り、それを享受していたといつてよい。時事英語誌『カレント・オブ・ザ・ワールド』に投稿したり、英・独・仏、そして手あたり次第、いろいろな外国語を学ぶことに没頭していた。「哲学」とか「人生いかに」というような問題はあまり関心事でなかった。良智先生の「言葉」は耳に逆らい、かえってますます語学の勉強に打ち込んでいった。

しかし、不思議なことには、その「耳に逆らう言葉」

が私にたえずつきまといつた。おそらく私の裡に、哲学への可能性がインプリットにはあったのである。たしかに、私は、語学だけでは、という一種の不足感、不充実の感じはもっていた。私の現在の同僚たちが、若い頃から哲学青年であり、哲学書を漁り、哲学科へ進んだのとはおよそ対照的に、私はただなんとなしに、ふらふらと、半年後に、西洋哲学科に転じた。良智先生の「耳に逆らう言葉」が導きとなったことは、いうまでもない。

それから、私は、西洋哲学科で、佐藤賢順先生のもとで、カント・ヘーゲル・ヤスパースなど、西洋哲学を読み、学んだ（佐藤賢順先生については、また別の機会に語りたい）。ただ、その場合でも、語学が優先していたといえよう。カントを読むにはドイツ語、ロックを読むには英語、サルトルを読むにはフランス語、プラトンを読むにはギリシア語というように、それぞれの言語を読むことに喜びを見出していったといつてよい。そのとき、また「耳に逆らう言葉」が鳴りひびいたのである。

私の寺は増上寺山内寺院で、近くの天光院には、当時、大正大学宗教学研究室主任の真野正順先生がおられ

た。私はときどきお伺いして、お教をいただいた。先生は病弱なお体を非常に大事にしていた。昼食後は必ず昼寝をされ、面会時間も指定されていた。ある日の午後、指定された時間にお伺いすると、先生は、君はいくつになったか、と尋ねられた。二十三歳です、と答えると、先生はただちにこう言われた。「哲学をやった二十三歳にもなれば、もう自分の思想というものが出てこなければいかん。」ところが、私は、当時、哲学を語学としてやっていたのである。痛い所を突かれたという感じがするとともに、また猛然と反撥したものである。しかし、このたびもまた、この言葉が私の耳底にたえず鳴りつづけたのである。私はその意味ではあせった。なかなか自分の思想など持てないのだ。三十代になって、ようやく語学としての哲学から離れられたと思ったが、なお、カントを、カントの言葉を、おうむ返しに繰り返して語学域を出なかった。四十代を迎えて、カントを離れてカントを語ることができるように感じ始めた。それでもまだ自分の思想の展開ではなかった。そしてようやく五十代になった今、なにかしら自分の思想というものを持ち得たように思う。真野先生に言われてから三十年

近くも経って、そのことが実現したのである。あるいは、先生の言葉は、この時期に私をこのレベルに導くための布石であったのかもしれない。これまでの私なりの軌跡は「自分の思想」への絶えざる闘争であつたといえよう。

そのおなじ真野先生が、前後して、もう一つ「耳に逆らう言葉」を私にあたえた。指定の時間にお訪ねした私に向かつて、真野先生一流の言い方で——先生の語りようや風貌をご存じの方々は容易に想像されるであろう——私を見下すような調子でこう言われた、「君は少し勉強が出来ると聞いているが、私はそのようなことは大したことではないと思っている。」若い私に自意識がないわけではなかった。カチンときたのは事実であつた。「しかし、それよりはだ、君は幼いときからよく仏さまに手を合わせるということを聞いている。それはよいことで、また大切なことだ。」当時の私は、精神的反抗期にあり、むしろ仏さまに手を合わせることを意識的に避けていたほうだった。率直に言って、ずいぶん厭味を言う老人だなと反撥したのであつた。ところが、この言葉

こそ、私の耳底にいつそう強く鳴りひびき、いままって鳴りひびいているといつてよいだろう。仏さまに手を合わせる、お念仏する、祈るということの深義は、いままって私の課題なのである。

佐藤良智先生、佐藤賢順先生、真野正順先生、さしあたりお三人の名が出たが、他の先師・恩師を含め、それらの方々は、私にとって、必ず「耳に逆らう言葉」を投げかけてくださった。それは「耳に逆らう」だけに、いっそう私の意識——潜在意識——にとどまり、私の心の深層における葛藤を通して、じつは私を導いていったといえるのである。先師・恩師は、その意味で、善友であり、善知識であり、仏である。「耳に逆らう言葉」はいつも私の痛い所を突いた。それは、いわば私の全てを見通し、知悉し、私のおおわれた可能性を鋭くえぐり出し、それを実現の機をあたえてくれたものであつた。智慧が慈悲であるとは、このようなことであらう。いま私は、私自身が教師として、学生たちに、かれらの「耳に逆らう言葉」をあたえることができる自分になっているかどうかと、自戒自省している。

(つづく)



（読）（者）（の）（べ）（い）（じ）

椎尾先生なつかしや

清しみ水ず

栄さかえ

（島根県大田市在住）

去年の盆八月号に愚老の拙文を読者のベ

ジに載せて頂き、汗顔の中に曾孫に至る十一人から絶讀を得て嬉しかった。あの折に貴会より「文章を綴ることは、老化現象を起さぬ、よい方法です」と教えられ、習慣の上に尚拍車をかけて、郷土史関係を中心に殆んど三十年書き続けている。折しも、永年の『浄土』誌の読者に賞されて、襟飾を御郵送頂いた。感

謝に堪えず厚く御礼申上げます。

『浄土』誌は八十五老一生の得難い「帰依僧」そのお方、机上第一座を占めて久しい。この机上の三百余冊によって私は私なりに八十五歳の煉瓦を積んだ。

思えば二十九歳の折に、長福寺で五重相伝会が催され、母に推されて初めて参加した。勸誠師は有名な増上寺の椎尾弁匡上人。よう



こそ出会えた帰依僧を、今日尚眼前に髣髴することができ。掛絡を頂戴いたし、これにサインをも頂いた。私の納棺には笈（二十五霊場巡拝の集印）と共にする掛絡である。今日は息子七月六日誕生、華甲の内祝です。最寄りの皆の揃った賀席に、今日頂いた襟飾添えて、私なりの感謝念仏、領解の程を伝えま

す。
一聯の珠数玉の如く、夕辺の円卓に二代三代四代五代と無病に目白押に並ぶ一つ棟の下に、此嬉しさを頂けるのもお念仏故と、朝夕の感謝が生甲斐の原点となる。初伝に曳かれて二、三、四、五回も参加させて頂けた。若い頃の母の感化の深さを懐かしく思う。五回目は去年の四月、松田等照上人の勧誡師、立居も不自由な八十七歳の姉を借りて、人生最後の姉弟を照覧して頂きたく、五重相伝会に迎りついた。

姉弟終生の思い出であった。あれから会う毎に語り合う。姉弟弟と三人皆八十歳の坂を

越して頑健で毎日の嬉しさを、親様に明日会っても、この長命を何よりと褒めて下さるだろう。

折角の長命、足元を大切に退屈など夢にも思わぬ心掛こそ生き甲斐です。他人のよいことと真似るより、少々悪くとも親の真似をすべきで、そうしてこそ家風は子孫に伝わり、珠数の強靱な系ぎ糸ともなる。私は父祖に習って、神も敬う。心潔白にして仕える。神とは仁義礼智信の道理を正さんがために在る。手前勝手な念願は無駄だ。昔の人は道義に立脚した生活をし、「この人を」と思えば以心伝心で相手に通じた。時の隔りが今日は相互の間に算盤をあしらいて善意もなかなか通じない。淋しいことよ。お互いの触れ合い悪くて何んの人生ぞや。幸いにして誇りある両親に恵まれた。その足跡を辿ろう。胸を張って相統せるお念仏の口称。八十五老の元気はここに発祥する。

浄土句集



一田牛畝選

三重 山田 うた
老鷲や山の僧堂廊長し
大分 熊谷 秋月
棒樫の若木なれども蟬涼し

福岡 江上 樋村
待つ友の浄土へ麻の衣着て

評 四国高松の細井僧正御遷化の追悼句である。お浄土には沢山の高僧の友が待たれている。麻の衣を着せての御出棺。

京都 岩井 伏水
京菓子のその名涼しき水ぼたん

評 名所旧跡と、お菓子で有名な京都である。沢山の菓子の中で水ぼたと申す菓子は誠に涼しい名である。きつと美味。

福岡 林 澄山
おがまれる身となり法主さま涼し

評 今迄何とも思わなかった上人が法主に選出された。法主さまと尊敬するのは心

うれし涼しき限りであるらしい。

東京 新井 新生
寄ればまた医薬の話平易し

東京 真野 竜
ドック入り事無くすみてて五月晴

福岡 原 敬二郎
万緑の中の廻廊牡丹を

福岡 福田 流水
夕立の降り惜しみたる暑さかな

東京 細田 初枝
三伏や喘ぎて登る男坂
東京 吉田ゆきえ
打水に石それぞれの色もてり
福岡 青柳 良巖
開眼の法会明るく夏の雲
福岡 荒牧 還愚
梵妻のサンガラスとは似合はざる
福岡 高良 幸代
勢う鶴に上るしぶきの綱捌き
群馬 島津 か寿
青葉木兎^{うさぎ}一人きく夜の寂として

福岡 渡辺 祐誠

梅雨明けや部屋開け放ち入坐禪

東京 末常てる子

同窓会みな若やきて五月晴

山口 上野 明達
新緑に包まれている萩城址

山形 松田 光誉

バス降りて片蔭とてもなき坂路

東京 吉原登起子

一羽降り続いて四五羽雀の子

福井 深井 鉅士
生かされて他力に縋る法然忌

山形 松田 允子

口紅の色かへてみる徽鏡

東京 満尾衣有子

武者人形五男育ちて古にけり

山梨 青山富貴江
風鈴のよく鳴り梅雨のあがりたる

福岡 高良 慈風

古き世の徽の大絵馬見てあかず

東京 田中 秀代

薰風に木の葉さやぎて瀬音かな

山口 三井 寛静
漬け終えて梅の香匂ふ厨かな

福岡 上滝津弥音

道連れになりし蠅も御忌詣

東京 阪入志津枝

日にしるき雨の葉越しの花石榴

大分 丹羽 難中
空梅雨に草取り疲れたる沙弥等

東京 真野よし子

お洒落してみたさもありし衣更

三重 森 静枝

木犀の匂ひのついて来る夜かな

福岡 安藤平次郎
代掻の人なかなかに昏れきれず

東京 小笠原香祥

驚群るる大樹を背なに一漁港

福岡 服部 光代

葉の蔭を我が宿として雨蛙

福岡 永江 隆説
初孫の産れし寺の鯉轍

東京 猪瀬 幸子

紫陽花の供華に水かけ句座に入る

福岡 荒牧 亀齡

堀川の出水のあとの床柱

死刑囚に大悲無倦と照らす月 一田 牛畝

勢至丸ものがたり

第四回

宇宙船「父号」



わたしは 勢至丸（せいしまる）。

宇宙船「なむ号」にのって この地球へきてから 九年の歳月がながれて――。

平安時代もおわりにちかい 保延七年、西暦一一四一年の春。

ぬの
布 村 哲 哉
むら
てつ
や

夜のやみをやぶった武士たちのさけびが 父との別れのはじまりであった。

まだ 寒さののこっている この山あいの地、美作国（みまさかのくに）の一村でおきたできごと。

それは 影絵をみるような つかのまのできことであ

った。

門がたたきこわされる。

かぶとに身をかため 刀をかざした黒い影が 庭にたつ。

一人の武士が目くばせをすると 数人が戸をけやぶって 家のなかへとびこむ。

くらやみを走りまわる足おと。さけび。

「時国（ときくに）はどこだ。」

「あつちを さがせ。」

そんな声を ゆめの中にききながら 母におこされたわたしは なんとはなしに 小さな弓矢を手にしていった。

えんがわに出たわたしは 弓をかまえると 庭にたっている武士にむかって 力いっぱい矢をはなった。

つぎのしゅんかん 武士は目をおさえたかとおもうと さげんだ。

「引きあげる。」

どやどやと 父のへやからとび出してきた いくつかの影が わたしのまえをよこぎって 庭の武士のところへあつまる。

「もうすこしで 時国を殺せます。」

「もういちど行って とどめをさしてきましょう。」

そういう者たちをおさえて 武士がいった。

「いや もういい。これで引きあげる。」

目をおさえている武士をかこむようにして、影はひとかたまりとなり 門をでていく。

ふたたびおとずれる静かなやみ。

父の部屋に ほおーっと明かりがともった。

えんがわに立ちつくしていたわたしは 持っていた弓をなげすてると あかりのところへ かけだした。

父のきずの手あてをしていた母が てまねきする。

母とわたしが 枕もとへにじりよると 父は ふーっと大きな息をした。

そして ひとりごとのように、

「これでいいのだ。これが わたしのやらなければならぬ仕事だったのだ。これでやっと いままでいっていたことを おこなうことができた。」

というと 母とわたしに ほほえんだ。

父が いつもいっていたことというのは 『すべてのいのちは ほとけさまからの おあずかりもの。だから

みんな ほとけさまの子どもだ。おたがいにとわりのあわなければ』ということであつた。

そういいながら おもうとうりにならず 多くのものを ぎせいにしなければならなかつた父。

それが つらかつたのだらう。

わたしは それを見つけてきた。

「これでいい。」

そういう父には せめこんできた相手にたいして ていこうしたようすがなかつた。また その氣持もなかつたようだ。なるにまかせていたような 受け身のきずである。

もし、わたしの矢を受けた武士が あのとき 声をださなかつたら、父は その場ですでに殺されていたかもしれない。母とわたしに 口をきくこともなく。

ひどいきずをおいながら 父は そのことを とうぜんとしているかのように 静かにいった。

「勢至丸 あのときも おまえの友だちを助けることができないうで わるかた。さぞや わたしをうらんだことだらう。しかし わたしには どうしようもなかつた。

ほとけの子どもどうしだから いたわりあわねばならないことは よくわかつてゐる。でも それができる——。」

すぎさつた日々を おもいだしている父。

わたしも おなじであつた。

水のなくなつていく泥のなかで びよんびよんとはねまわつてゐた鯉。

池でおぼれているわたしを たすけてくれた小犬。

作物がとれないために 餓死(がし)した父親のかたきをとるんだと となり村の武士の家へ火をつけて そのまま帰つてこなかつた友だち。

みんな いっしょうけんめいに生きようとしていた。

それなのに どうして生きていくことができないのか。

せつかく この地球でいっしょになつた仲間なのに。

そのうえ 殺しあうなんて。

わたしは どうしたらいいのだらうか。

みんながしているように あゝの武士へ仕返しをしな
れはいけないのだろうか。

ほとけさまの子どもだといながら けんかをしな
ければいけないのだろうか。

手をあわせながら 殺しあわねばならないの
だろうか。

父とおなじことをくりかえす。
はてしない殺しあい。

なんのために ほとけさまなのだろう。

ほとけさまの子どもとは いったいなんなの
だろう。

そばにいる母も おなじ気持だったよう
だ。

そんなけはいを 父は感じたのであ
らうか。

しっかりした言葉でいった。

「くやしいかもしれないが かたきうち
はするな。

つらいだろうが 相手をうらむな。

そのくやしい つらい思いを ほとけ
さまの方へむけ

ておくれ。

これで わたしは自分のやるべき
ことを すべてすま

せた。ありがたい。」
そうだったのだ。

父は 自分が切られて 血だらけになりながら『これ
でいいのだ』という。

『かたきうちをするな』という。

『うらむな』という。

『みんなが 生きられる道をさがせ』という。

それが むりなことだっただけに、父には しんばい
だった。ことばだけでは わすれられそうだった。

だから 身をすてたのだ。

からだでもって しめしたかったのだ。

自分の血で 母やわたしに 書きのこしておきたか
ったのだ。

おもいだすことのできる一枚の絵として。いつ
までも

色あざやかな絵として。

その絵によって わたしは いつまでも父のねがいを

おもいおこす。

「すべてのものが ほとけさまのもの。

赤いのや青いのや 黒いのや黄色のや白いのや みんな

などれも あざやかに生きている。ほとけさまの子ど
も。」

元氣なとき 父は えんがわに立つと よくいっていった。

「ほら 見てごらん。お月さまが あんなにあかるい。でも うらがわにまわれば まっくらだ。ひとつのお月さんでも あかるいところくらいとある。どんなものにも かならず ひかりとやみがある。やみがあるから ひかりがある。

それが うつりかわる。

くらやみが あかるくなり あかるいところがやみになる。あかるくなったり くらくなったり。

そして あかるいところが大きければ大きいほど くらいところも大きい。

また やみがくらければくらいほど ひかりはあかるい。

あのお月さんのひかりも うらがわのやみにささえられた ひかりなんだよ。

おおくのものが 死んだり殺されたりした。そのことが やみなのか それともひかりなのか わしにはわからない。

ただ それらに われわれがささえられていることはまちがいない。

やがて わたしも ささえる身になる。

ひとつの しあわせのためには 多くのささえがある。

たくさんの ぎせいがあるのだよ。

わすれないようにしなければ。」

きゆうに部屋のなかが あかるくなった。

雲のあいだから 月がでたのだ。

父が 手をあわせた。

母とわたしも 手をあわせる。

春の夜の やみとひかりのなかを。

宇宙船「父号」が ゆく。

やみをささえる ひかりとなって。

かがやきながら 宇宙船が とぶ。

(つづく)



後鳥羽院と御製『無常講式』(一)

たからだ まさみち
宝田正道

(浄土宗出版室主幹)

○ はじめに

後鳥羽上皇は、新古今和歌集その他の歌集を勅撰した歌聖として知られるが、また承久の乱に敗れて隠岐に遷され、在島十九年怨念と孤独のうちに彼の地で崩じた悲運の帝王としても名高い。隠岐院あるいは隠岐法皇とも申し上げる。

院は、晩年、心を浄土に傾け、信仰の結晶

ともいうべき御製『無常講式』一卷を作って世に残された。

当時は、専修念仏を主唱して乱世の星と輝いた法然上人の滅後、二、三十年の頃にあたる。京洛では遺弟らを中心とした念仏の興行が一層盛んになっていた。しかし、南都北嶺の弾圧は相変わらず強く、法然の遺骸を暴いて鴨川に流そう、などという暴挙さえ企画されたりした(嘉祿の法難)。政治的、社会的にも、不安定で不穏な時代であった。

この間の時代背景や社会の流れ、宗教界の動向などを見つめる一方、隠岐の配所で流人の生活に耐えつつ、やがて『無常講式』の述作にまで辿りつく院の心の動きを探ってみようとするのが、本稿の主眼である。しばらくの間、思いを七百五十年の昔に遡らせて、ともにめまぐるしい歴史の跡をふり返りながらその悲運の境涯を偲んでみようではないか。

一 院の生い立ちと時代背景

治承四年（一一八〇）七月十四日、後鳥羽院は高倉天皇の第四皇子として誕生、諱を尊成という。母は七条院、藤原殖子である。建礼門院平徳子を母とする腹違いの安徳天皇とは、四つ下の弟君に当る。

この年八月、源頼朝が伊豆に挙兵、十月、鎌倉に凱旋、「平氏追討」という以仁王の令旨を奉じて各地に蜂起した源氏の統一を図る。十二月には平重衡の南都焼打ち、翌年二

月には独裁者清盛の病死と続き、ついに文治元年（一一八五）平家一門は幼帝安徳天皇とともに西海の藻屑と消え果てるのである。

この間、養和元年（一一八一）には、前年以來の全国的凶作、大飢饉のため、京中に死者が充満、河原などは死体の山で通行もままならず、死体に「阿」の字供養を受けた者が左京地区だけで四万二千三百余に達した、という惨状を、鴨長明は記録している（方丈記）。

おりから、専修念仏を掲げて東山吉水の地に浄土の教えを勧めていた法然は、末法濁世の現状と民衆の苦患を嘆きつつ、文治二年（一一八六）には、大原勝林院に「大原談義」を開いて、機根比べに勝ち、「智慧第一」の名をようやく洛中に知られるようになった。

後鳥羽院は、このような騒然たる社会情勢の中で、わずか八歳にして壇ノ浦に沈んだ兄君安徳帝の悲運を聞かされつつ、寿永二年（一一八三）八月、その後を襲って、第八十二代の皇位を継承した。御年わずかに四歳であ

る。同じ年のこと、木曾の冠者が花洛に乱入して、法然をして「一日聖教を見ず」と嘆ぜしめた乱世のさ中である。

院は、生れつき多芸多才のようであった。長ずるに及んで、次第にその性格も猛く、趣味も広く明らかになっていく。

建久三年（一一九二）三月、十三歳の時、祖父後白河法皇の死に遭う。同九年（一一九八）一月、早くも位を第一皇子土御門天皇（四歳）に譲って上皇となり、院政を布く。この間、頼朝は愛娘大姫の入内を望むあまり、反幕派の丹後局（後白河法皇の寵姫）や源通親（後鳥羽院の乳母範子の夫）の専横を黙認、盟友の関白九条兼実を政権の座から失墜させるとともに、中宮だったその女任子（宣秋門院）も内裏から追放した。建久七年の政変であるが、やがて大姫は病没、頼朝自身も正治元年正月（一一九九）にあっけなく世を去り、幕府内부는微妙な動揺を来たし始めるのである。

ちょうどこの頃、失意の兼実は、しきりに

法然を訪ねて法門を聴き戒を授かって、専修念仏の道に帰する。建久九年、法然が主著『選択本願念仏集』を撰したのもその請いによる。法然門下には、すでに法蓮房信空、真観房感西はもとより、善慧房証空、熊谷直実（蓮生）、勢観房源智、高野の明遍、聖光房弁長ら、後に高足となる人々が続々と入門して、念仏門はすこぶる活況を呈するに至った。

成人した院は、文武両道に心がけ、流鏑馬、犬追物、水練、相撲、刀剣鍛冶、蹴鞠、その他将棋の類に至るまで通達したが、特に和歌の道にはきわめて堪能で、建仁元年（一二〇二）には二十二歳にして早くも和歌所を復活、定家らに命じて『新古今和歌集』の撰進をするなど、歌聖としての片鱗を輝かし始める。

元久元年（一二〇四）、南都北嶺から念仏停止の訴えが起され、法然は「七ヶ条制誡」を作って起請文とし、門弟九十八名連署の上山門に送るが、翌々建永元年（一二〇六）にはつ

いに鹿ヶ谷の官女剃髮事件がきっかけとなって土佐（実は讃岐）へ配流の刑を受ける。院の逆鱗に触れたからであるという。

しかし、院はこの頃、はたして仏教界の動向に対し、あるいは自らの信仰について、どれだけ深い関心を抱いていたかが、疑問視される点も多い。

元久二年（一二〇五）、院は鎌倉幕府調伏のため、最勝四天王院を造営した。しかし、後、將軍実朝が暗殺されて源氏の嫡系が断絶した承久元年（一二一九）には、わざわざこの寺院を壊させている。呪詛の目的を達したからであろうが、ずいぶん無駄なことといわねばならぬ。

また、無駄といえは、院は退位以来、配流までの二十三年間に、院御所を十八ヶ所も造営させた。大変な贅沢であり濫費であるが、当時の貴族にいわせると「天下（朝廷）の力まだ衰えざる」証拠として是認されていたのかもしれない。外観を誇示する形式的官権主義

の表れである。

そういえば、俗に「蟻の熊野詣」といわれて、この時期は、熊野信仰の最盛期で、貴賤上下を問わず、おびただしい人々が紀伊の熊野三山に参詣したが、院は実に前後三十数度にわたって熊野御幸を行なった。その都度、供揃えその他に莫大な官費を要したことは、いうまでもない。

すでに三十代を過ぎて有能富裕の貴公子ともいべき院が、皇室の力を示威のために、このように豪奢な散財をしたとしても不思議ではない。しかし、当時の院政は、一人の隠れた女性実力者によって万事左右されていたことも、忘れてはなるまい。

その人の名は、卿二位、卿局とも呼ばれた藤原兼子。前代の丹後局に代り、源通親の没後、特に院の乳母の地位をかりて院内の権力を一手に納めるようになった。藤原定家にいわせれば、「狂女」（明月記）であるが、院政の中核的実権はほとんど彼女が握っていた、

といってよい。任免、昇格その他、上奏下達
の一切は彼女を通じてでなければ行われな
かった。定家も、だから、悪口を言いながら
も彼女に贈物をしてご機嫌を損ねないよう、
気を遣う始末であった。

これらの内部事情から想察すると、院は、
和歌その他の諸芸の面こそ自由に振舞うこと
ができたものの、政治の面、特に巨費を徒勞
にしても熊野詣でや御所の造営を行なったの
は、むしろ皇室の力をかりて自らを誇示せん
とした彼女ら取巻き側近の野望に左右され
たのかもしれない。法然を罪科にしたのも、院
自身の発意というより、これら陰の実力者の
指図によったものではなからうか、とさえ疑
われるのである。

いずれにせよ、院が、兼子ら側近の保身策
から出た院政強化の甘言に乗せられて、次第
に武力討幕の思いを固めるようになったのは
事実である。

もともと院は、平素から

奥山のおどろが下も踏み分けて道ある世
ぞと人に知らせむ

と詠むくらい、朝権の衰退を嘆く熱血の天子
であった。そこへ承久元年（一二一九）、実朝
の暗殺事件が起きて源氏三代が減び、代りに
北条氏が政權を担当した。しかし、幕制内部
の動揺は隠せない。公武の対立が、この隙を
ついで表面化する情勢となったのも無理から
ぬことである。

武を重んじていた院は、在京御家人を中心
として、いわゆる北面、西面の武士団を擁
し、いつでも討幕の軍を編成できる体制を調
えていた。この自信が、院の周辺の人々によ
って次第に武力による官軍の勝利を過信させ
る一つの原動力となり、ついに具体的な秘策
を練るまでに進展する。承久三年（一二二一）
四月の頃である。

(つづく)

◆◆◆“浄土句集”欄への投句のお願い

—及び俳文等の寄稿のお願い◆◆◆

『浄土』誌本文中のオアシスともいうべき、“浄土句集”欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この“浄土句集”欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いします。

一、内 容 俳文、句会便り等の随想

一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度

一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会



念佛ひじり三国志

(百)

―法然さむぐろ人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



「法然ご房とは不思議な仏者です」

と思わずも言ってしまったから明遍はおのれの口をふさぎたくなつた。

相手が悪い。卿二位兼子のような「底意地の悪い」女に法然を語るとは、明遍自身の正体をさらけ出す結果になることは必然だからである。長年にわたる自分と法然との間柄は、明遍の側に複雑な屈折があったわけで、

それがなければもっと以前にすんなりと同志ないし師弟の道が開かれていたはずである。ところが大原問答このかた、じかにとつくりと語り合つたことは一度もない。

明遍も頑強だったが、法然も来る者は拒ばまず、去る者は追わずの態度を絶対に崩さなかった。俊乗房重源をはじめ多くの共通の知己がいたにもかかわらず、明遍と顔を合わせようとは言ひ出さないのである。

「さようですか。どのように不思議なお方？」

兼子はやさしい笑顔を向けてくる。相手が胸にふくんだものを洗いざらい吐き出させずにはおかぬ魔力を秘

めた笑みだった。

それは、百も承知なのだ。でもひとたび洩らした以上、あとへは退けなかった。

「仏者にもさまざまな型があります。強い人、賢い人、徳操の高い人……法然ご房はそのどの型にもあてはまらない」

「しかし、賢いお上人なのでしょう」

「そりゃあもう当代随一。いや南都北嶺を通じて、あの方ほどの学秀は二人と出ますまい。でも同時に強くて、徳が高く、もう一つだいいなものがあるんですよ」

「何ですか、そのだいいなものって」

卿二位は眸をかがやかせて明遍の口もとを見つめる。

「可愛いお人なんです」

「可愛い？ おホッホッホホ」

明遍もつられて笑いだしていた。

「可愛いという言い方はびったりしないんですが」

「まるで稚児衆童みたい」

「そう、そんな感じではない。賢くくて意志の強いお方だ。普通だとそこに可愛ゆげなぞ混じりこむ余地はない。ところが法然ご房は賢さと強さと同質同量でそれ

がある。だから、みんなあのご房のために命まで投げ出したくなる。現にこの明遍までがそうです」

「明遍さま、あなたまで今度の事件で命を投げ出すつもりなんですか」

思いなしか、兼子の口吻に冷めたいものが一筋さしこんできた。

「だってそうでしょう。あのような捏造をあなたに頼みこんだ。まさにあなたの胸先三寸ですよ」

「妾の胸先三寸？」

「あなたがこの明遍をおとし入れようと、別な口実で院にお伝えしたら、例えばですね。小鬼と密通したのは、ほかならぬ僧都明遍だったとひと口おっしゃったら、住蓮ひじりの運命は即座に私のものになってしまいう」

「そうして、あげましようか」

老女兼子は坐りなおした。ほんのわずか、腰を崩しかけただけだが、そのあたりから粘っこい好色の液のようなものが流出してくる感じであった。

魔女たるゆえんであろう。

「……」

明遍は息をのんで次の言葉を待つばかりである。

＜往来する念仏ひじりたち＞



そうなのである。住蓮の頼みを聞き入れたとき、すでに明遍はそれを覚悟していなければならなかった。相手は政治の妖術師卿二位ではないか。

だが、そんな懸念危惧を微塵もいだかずに、まっすぐ此処へやってきたということは、住蓮への共鳴ではなくて、意識下で強く法然へ魅きつけられていた事実、今更のように思いあたるのであった。

「もう少し前だったら、あなたを八つ裂きの目にあわせていたでしょうよ」

兼子はふてぶてしく言っていた。

「もう少し前とは？」

「あなたが浄土寺二位、丹後局と密通していたころですよ」

「……」

あの情事を知っていたのか。高階栄子とのふとした気まぐれを、この女はちゃんと承知していたのか。

「でもあのころ、丹後局はもはや歯牙にもかからないお人でした。当然あなたとの密通を暴露しても無意味でした」

宮廷における高階栄子の権力が失墜していて、兼子の

ライバルとはなり得なかった、という意味だ。

「なるほど、法然ご房という人には、従う者に命を投げ出させるような魅力があるということですね」

「そうです。私とて、あのご房とそれほど親しい関係ではない。しかしひと肌もふた肌も脱いであげたくなくなるです」

「なぜでしょうねえ」

「わからない……普通、賢い人、強い人、徳操の高い人には、それぞれ共通した欠点があります。賢いゆえに相手から反撥を買います。強い人なら、それなりに尊敬はするが、いざというときにはその強さを試めしてみたくなくて敵側へまわってしまうものです。それが法然ご房は逆だ」

「ということは、僧都明遍さまにはそこまでの魅力がない、そうなんです」

さすがは卿二位兼子だった。ずばり凶星をついてくる。

「そのとおり。だから私には法然ご房に取って替って念仏者の頭目なぞにはなり得ない」

「その魅力とは……法然ご房が阿弥陀さま、仏さまだから

らでしようか」

明遍は笑ったつもりだった。でも顔はゆがんだだけで、表情はけわしいものになっていった。

「そんなことを法然ご房の前で言ったら、あの人は全身の毛穴から汗を吹き出して、失心してしまふでしょうよ。つねに自分は煩惱具足、十悪五逆の男と信じこんでおられるお方だから」

「少しづつ判ってくるような気がしますね」

「思えば愚かな話で、ほんらい十悪五逆の奴が、もしかするとおのれは仏になるかもしれないと夢見ているし、本来仏の器量をそなえた法然ご房が、絶対にそんなことを受けいれようとはしない」

「その愚かな方が、明遍さま、あなたですか」

「ああ、そうなんです。そんな自負、おごりがあつたればこそ、私はこれまで素直に法然ご房の前へゆくことが出来なかった。いつかあの人を凌駕してやるぞ、超えてやるぞ。そんなことばかりを考えてきた」

明遍は、今にしてようやく晴れて法然の前へ顔をあげたまま出てゆけるような気分になっている。長年のわだかまりが、根こそぎ払拭された思いなのである。

それこれも妖女卿二位兼子にすべてをぶちまけてしまったからであらうか。

兼子自身は、全く別の視座から事態を凝視しようとしている。

「院もたいへんな人にかかわり合いを持ってしまったもんですねえ……」

法然を裁かねばならない後鳥羽上皇のゆく末を案ずる風懷であった。上皇を幼い日から育ててきた乳人兼子としては当然の不安だったにちがいない。

一一

「明遍さまは信濃へいったことがありますか」

卿二位兼子は突然、話題を変えてきた。

「信濃？」

「善光寺さま」

「ない。未だない。あなたは？」

「権大納言が思わざる死を遂げられたあと、お骨を埋めに信濃まで出かけました」

なぜ、いきなりこんな話題を始めたのであろう。明遍

はいぶかった。

権大納言とは兼子の先夫宗頼のことだ。九条兼実の家司だったが、建仁二年（一一〇二）の暮れ、熊野參詣へ供奉した。

——発心門の王子ニオイテ寒氣ニ依リ足ヲ材燈ノ火ニ踏ミ入ル。不覺ニシテソノ指ヲ焼キ損ジオワソヌ。猶行事アリテ逗留。帰洛以後、ソノ足スデニ無キガ如シ。貞經ヲ招キ香藥ヲ付ケシム。彼ノ口狀ニ任セテ療治シ、元日ニ出仕ス。行歩ノ跡惠膿流ルト云々

〔明月記〕

そんな病状で翌三年の正月二十九日（「愚管抄」では正月三十日）五十歳で死んだ。妻の兼子は一つ違いの四十九歳だった。

兼子は茶毘に付した夫の遺骨の一部を抱いて、同年夏七月、信濃への旅にのぼったという。

その点には兼子自身ふれなかったが、この信濃行きに「裏」があることを明遍はすでに某筋から聞き知ってい

た。

未亡人となった兼子にしきりと言ひ寄る男性がいて、その求愛をかわすのが真の目的だったと言われる。

男とは、内大臣久我通親の実弟通實である。すでに姉の範子は通親と結婚しており、その通親が他界した現在、弟通實としては是非とも兼子と結んで後鳥羽院政の舞台で踊りたかったのである。

だが兼子はもう落ち目の久我家なぞへは一顧だに与えなかった。亡夫への貞節を看板にして亡夫の遺骨を抱きしめ、信濃へ逃げ出してしまったのである。その時点、兼子はすでに太政大臣だった現夫の頼実と出来ていたと言われる。

頼実には立派な正妻や子供があり、年若い愛妾もいたが、あえて姪桜の兼子をもとめた。正式の婚儀がととのったのはこの年歳暮になったが、宮廷政況における女権の凄さまじい威力がしのばれる。

「善光寺の周囲は、山裾近くまでいちめん真っ白でございましたよ」

「雪ですか」

「まさか。夏のさなか、盂蘭盆会に合わせて出かけたの

です。高い山の頂きには残雪がございましたが、野は緑りで、犀川の川原では綺麗な花が咲いていました。墓でございますよ」

「墓ですか」

庶民たちが肉親に死別するとその遺骨の一部を信濃善光寺へ運ぶことは、かねて明通も聞き知っていた。だがどのように処理するのかは知らない。

兼子の話によると、銘々が周辺の土地をえらんで川原の石を持ち来たって手製の墓を造っていたのである。

「折から盂蘭盆会にあたっていました。石の墓石の間におびたらしい人々がうごめいていて、今更のように死者と遺族との強い絆を知りました」

当時の盂蘭盆会も七月の十三日から十六日が送り火となる。ただし宮中や貴族は十五日に祖霊祭を営んで、先祖を祀っている。仏教がこの国古来の民俗宗教と習合した痕跡が濃厚である。つまり死霊を迎えたり造ったりするのではなく、祖霊たちに自分らの生活圏を守護して欲しいという考え方が強いようである。

農耕者が大半だった日本では、とりわけ米作が中心である以上、最後の草取りを終えるのがこのお盆のころ

で、秋の収穫期まで無事に稲を守ってもらいたいと祖霊に祈るのであろう。昭和になって太平洋戦争の終結を八月十五日とした考え方の根底にも、敗戦の混乱時とは言え、この祖霊祭の日に飛びついた気配がある。

ところで当時の善光寺信仰だが、これは今日の想像を絶した強烈なものがあつたようだ。「死人の善光寺まいり」と呼ばれ、死者は息を引き取るとすぐに信濃の善光寺さまへ走ってゆく、と信じられたのである。

だからこの旅にそなえて、死人が出るとすぐに飯を飲いた。生前常用した飯茶碗に盛りつけ、さらに握り飯を四箇つくって食膳の四隅にそなえた。「枕飯」と「死弁当」である。

こんな習俗が近畿一带はもちろん、四国や九州にまでひろがっている。死者は息を引き取った途端に大旅行をするわけだ。しかも湯灌のときにはもう帰っているというのだから忙しい。

七日供養も済んで落着くと、茶毘に付された遺骨の一部は遺族によって遠く善光寺にまで運ばれてゆく。

江戸期になるまで、庶民は殆んど墓地らしいものを所有しなかった。遺骸は遺骨は近くの山に埋めてしまった

のだ。そんななかでわずかに自家の墓地と言えるものが、善光寺へ運んで寺の周辺へ埋め、川原で拾った石を石造りの卒塔婆がわりににしたものだけであった。

現在の長野市一带はどこを掘ってもこうした石くれが出土してくるそうである。この平安末期、善光寺平の一隅に立って、伽藍のある山裾を眺めやったとき、まっ白な石群がひろがる光景が眼にうつるようである。

「それと、あのあたりには沢山の老人が棲んでいました」

と卿二位兼子は語り続ける。

「信濃は長寿国なのでしょうな。姨捨山などというところがあります」

明遍は知識をひけらかそうとする。

「いいえ、土地の老人とも思われません」

「どこから来たのでしょうか」

「おそらくお骨を埋めにきて、そのまま棲みついていたのではないのでしょうか」

「そのまま棲みついてしまう……」

夫が妻に先立たれ、あるいは一人子に死なれた夫婦が、生きる望みを失って、自家墓地のかたわらで余生を

送る。それもあり得ることだったかもしれない。

余生とは言ってもきびしい寒気だ。食糧も乏しい。とても老人天国などと呼べるところではないであろう。しかし、もはや現世に希望を失った老人たちだ。仏の世界だけを見つめて、残り少ない命をみずから食べ尽していったにちがいない。

「明遍さま」

兼子は再び表情に妖しい笑みを取り戻した。

「何でしょうか」

「あなたも一度、信濃へお出かけになったらよろしい。じかにあのお骨の山や老人たちの姿をご覧になっていらっしゃい。あれを見ないで、世捨てだとか隠遁だとか、軽々しくは言えませぬ」

鋭い指摘だった。頭脳だけで思いえなく明遍の浄土観を、兼子は辛辣にえぐってくる。何という逞ましい女であるうか。兼子自身はその「地の涯て」を目撃してきて、花洛へ舞い戻るやただちに正妻を追い出して大相国頼実と再婚している。お互いに五十歳にもなんなんとする老骨の契りであった。そして廟堂で飽くことを知らぬ権謀術策に明け暮れるのである。

この時点における兼子の意図は、強大に勢力をひろげつつある念仏教団の盟主として、法然にかわって明遍を押し上げようと構想していたのかもしれない。

三

明遍は、卿二位兼子の指示を受けいれて信濃の善光寺へ出かけることになる。ただしそれはこの年の春も深くなった五月であった。

指示を受けいれたが、この信濃行きに明遍は兼子がいえがいたような野望は微塵も持ち合わせていなかった。純粹な世捨て人となって出かけたのである。そんな野望をおこし得ない体験で明遍の心は洗い清められていた。

どんな体験だったかは、あとでふれよう。

何もかもを語りつくして倦怠感に似たものが座にただよいはじめた。こうなると政治家の兼子は露骨に相手を忌避する。

「もう御用は終わりましたね」

「終わりました。最初に申し上げたことをくり返します

が、相手は死にもの狂いです」

「わかっています」

「ひとつでも方法を誤まると何が惹起するかわかりません」

「よく承知していますよ。それに、そんな死にもの狂いの人間を死罪になんかしませんよ」

きっぱりと兼子は確約した。

「そうあって欲しいものです」

「それを喰い止めるのが政道というものでしょう」

その政道が怪しい。突っかかってゆきたいところを明遍は耐らえた。もはや会話を継続する雰囲気ではなかった。

岡崎の新邸を出ると、街には粉雪が舞っていた。この季節はいつもこうだった。どんなに晴れた日でも四囲の山から雲が舞いおりてきて雪をばらまくのだった。

たちまち路傍の草々が白く染まってゆく。

明遍は、どこへともあてもなく歩き続けている。方向が住居の光堂でないことだけはたしかである。

俺はいったい何者であるか。

さっきから同じ問いばかりをわが心へ投げかけてい

る。

来し方をふりかえると、無駄な道ばかりをえらんで歩いてきたように思われてならない。人間としても、仏者としても、この年になって道標らしきものへ唯の一度もゆきあたったことがないではないか。

さつき卿二位兼子に、問われるまま法然の人柄をしやべってしまった。

智慧深い。志操強固である。徳も高い。しかもこれに加えて法然には、接した万人から慕い愛される何かがある。

その点お前はどうか。

たしかに智慧や志操、ぎりぎり譲って徳性においても、法然に負けないものは持っているつもりであった。にもかかわらず、二人を並べて見たとき、その像は余りにも容量において違いすぎる。自分などは法然の半分もあるまい。

これはどこに原因があったのか。

最後の慕い愛される何かが、自分にはまるでないのである。

なぜないのか。

明遍は追究する。

路面を見つめすぎて、前傾を深くしすぎたせいか。石くれに蹴つまずいてよろけた。危うく雪に濡れた地上へ両手をつきそうになった。

そうだ。自分がかって一度だって心から人を愛したことがない。愛したことがないから、愛されないのだ。

法然は天性、人を愛する豊かな情念があるのだろう。この情念が、智慧や徳性でみがかれて、抱えきれぬような巨像になってしまったにちがいない。

天性――

果たしてそうだろうか。これは学び取れないものであろうか。

想念をそちらへ向け変えたことで、明遍はわずかな救いをおぼえた。自分にも余命は未だ数年が残されているであろう。この歳月を、ひとを愛することのみに集中してみたいのではなからうか。

「明遍どの」

どこか遠くで呼びとめる声がある。

ふりむくのも何か臆劫だった。もう少しこの点を考えて詰めてみたい。

「明遍僧都——」

鋭い声がすぐ附近でした。

道は左手がまばらな雑木林になっていた。呼びとめる声はそこからひびいてくる。

人間の姿より先に黒鹿毛がうつった。林のなかで雪やみを待っていたのか。

僧形で、しかし外装は武者装束だった。大身の太刀を握りしめている。

「尊長僧都」

「どこへゆかれる?」

「どこへ……」

俄かに全身が緊張してきた。うっかりした返答は出来ない。相手は司直の権を握った男だった。いわんやこの一兩日来、明遍の身辺を見張っているのだ。

「安居院へゆくところ」

「安居院? ああ聖覚どののところへか」

たしかにこの道は安居院へ通ずると確認できて、ホッと安堵する。

「この冷えこみじゃ、温室にでもひたろうと思つてな」

安居院には結構な温室(うんしつ)——風呂場があつ

た。

「岡崎の新邸には何の御用で」

兼子を訪ねたことまでちゃんと知っているのだ。いや、あの門前は院の武士たちで警固されていたが、報告が届いたのであろう。尊長は黒鹿毛を飛ばして駆けつけたにちがいない。

「なあに信濃へゆく道をたずねてきた。近々善光寺へまいろうと思う」

「さようか」

あとは何も言わず尊長はじろじろと眺めまわしている。明遍は金縛りにあったように動けなくなった。

「明遍どの、ひとつたしかめておきたい」

口調をあらためてきた。

「何のことかな」

「僧都は専修の仲間か」

「いや……」

「しかし、ひじり名はあるのじやろう」

「ひじり名か。それは亡き俊乗房重源どのが勝手につけたな」

「何と申したかな」

「空阿弥陀仏」

「空阿弥陀仏か。同じひじり名で別人がおろうが」

「うむ、たしか四天王寺あたりにいる空阿弥陀仏」

「風吟の好きなひじりだったな」

「風吟が好き？」

明遍は初耳だった。

法性寺空阿とも、無知の空阿弥陀仏とも言われたひじりである。平家の侍武者あがりだったが、父母ヲ言ワズで、前歴はひたかくしにしている。

無智とはうわべだけで彼はたいへんな篤学家だとも聞いている。ただ風吟——風鈴を愛していたとは初めて聞く話だった。

「風吟の音色が、仏の妙音に通じているといつも申しておるそうな」

尊長の念仏ひじり調査は、まったくゆき届いているようだった。

「その空阿弥陀仏が……」

「僧都も同じひじり名なので混同する。うっかりすると、明遍僧都を搦め捕らえてしまうわい」
尊長は豪放に笑い飛ばした。

笑い声はそのまま恫喝につながる。

僧都とても下手な動きをしたら逮捕するぞ、と言いたげである。

「明遍を捕らえてもかまわんだらう」

と言ってから、おやっとわが身をかえりみた。

ついさっきまでの自分だったら、こんな台詞は吐けなかったであらう。要らざる弁明を尊長の前に並べ立てていたにちがいない。

「そんな真似をしたら、わしらのこれが危い。卿二位のご最良の僧都じゃからのう」

と尊長はわが首を撫でまわした。

これからねちねちと兼子との会話の内容を聞き出してくるのだらう。

でも明遍は心おだやかだった。さっきの一言が何か自信めいたものを与えてくれたようである。権力や恫喝に屈しない自信であった。

(つづく)

◎ 読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十八巻 九月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十七年八月二十五日 印刷
昭和五十七年九月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八―八二―一八七番

あなたの本を 作ってみませんか

日頃お書き留めの原稿をこの際ご整理なさって、あなたご自身の本を作ってみませんか。物価高の折から当社ではなるべく経費をかけないであなたの本ができますよう、ご協力させて頂きます。

A 5 判・100頁～150頁＝200部 35万～50万円ご用意下さい。遠方でも出張いたします。

そのほか、句集・歌集・詩集等の出版もお気軽にご相談下さい。

月影伝道用箋 宗祖法然上人の御詠月影のみ歌を側面に刷込んであります。伝道教化にご利用下さい。

定価 1 冊300円、5 冊以上 単価250円 (送料実費)

なお、あなたの座右の銘、警句、格言等の刷込んだ別註用箋も謹製させて頂きます。

有限会社 ルンビニ社 出版部
東京都千代田区神田須田町 2 - 3 - 11
電話 (253) 3520・3529